

— 連載 —

# 美術館のある風景 (第1回)



## 丸の内に生まれた美術館

三菱地所株式会社 美術館室 恵良 隆二

外国の街に出かけると自然と美術館へ足が向きます。建物の魅力と共に街のコンテクストに触れられる場所なのでしょう。また、風景は人と場所との歴史が織りなす有機的な姿と言われます。美術館は街の風景の魅力的な要素でもあります。そんな美術館と街への複眼的な視点で街づくりについて語らせて頂きます。

私の勤める東京・丸の内にも2010年春、三菱一号館美術館が誕生しました。この美術館は、丸の内の魁となった事務所建築「三菱一号館」(1894年竣工、1968年解体)を復元(2009年復元竣工)して美術館に活用したものです。歴史に根差した街の文化資産として次代に継承することを願って計画されました。

今から120年余遡る1890年に三菱社社長の岩崎彌之助(彌太郎の弟)は丸の内の土地払い下げに応じました。その時、ロンドンから電報で土地取得の支持を伝えたのが三菱の大番頭(しやうだ)荘田平五郎でした。その頃の丸の内は陸軍省の兵営や練兵場として「原っぱ」の様相を呈していましたが、丸の内一帯の商業地化を図る市区改正案(現在の都市計画、1889年)は定まったばかりです。岩崎と荘田の目的は「皇居の正面に洋風市街地を現出せしめて、帝都の美観と新興日本の文明を内外に知らしめる」(岩崎彌之助伝)ことでした。この時から「三菱が原」と呼ばれた丸の内は近代的な洋風

の街へと変貌を遂げていきます。荘田の計画は「理想のビルディングをこの土地に建設し、欧米流の会社、商品陳列所を創始し、更にサラリーマンのための快適な賃貸住宅を造成すること」(宿利重一『荘田平五郎』)でした。こうした総合的な計画の中で美術館も構想されています。宿利によれば、荘田は「ミュージウムのようなものをつくりたいので、コンドルと相談してほしい」と曾禰達藏宛の書状に記しています。コンドルは「丸之内美術館」の1、2階平面図を描きました。当時としては本格的な美術館として先見性に富む内容と言われますが実現しませんでした。コンドルは1877年に政府に招聘され、その後三菱社の顧問となった建築家で三菱一号館を設計しています。曾禰達藏はコンドルの教え子で三菱社の初代技師長となります。

今後の都市や街を考えると、美術館などの文化的な活動への眼差しは街の卓越性と可能性に豊かな広がりを与えてくれるでしょう。そんな視点から、120年前の美術館の「夢」は、長期的な街づくりビジョン実現への「志の表象」と呼ぶに相応しいと感じさせてくれます。今回は、高橋明也館長にバトンを渡します。三菱一号館美術館では、「三菱一号館美術館名品選～近代への眼差し 印象派と世紀末美術」を開催中、2014年1月5日(日)迄。